

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより

No.76
2025/11/30

HIMEYURI
PEACE MUSEUM
NEWSLETTER



戦後80年移動展 ひめゆりと八重山 開催

2025年8月1日から31日まで、石垣市にて、八重山平和祈念館(沖縄県平和祈念資料館分館)と共に、「ひめゆり平和祈念資料館 戦後80年移動展ひめゆりと八重山」を開催しました。県内移動展としては4か所目の開催となります。

オープニングセレモニーには、八重山出身の元ひめゆり学徒やそのご家族、ご遺族が訪れました。沖縄本島や県外からも参加者が駆けつけ、石垣市での開催を心待ちにしていたことがうかがえました。

開催期間中には、オープニングセレモニーのほか「学芸員によるワークショップ」や、琉球放送アナウンサーを講師に迎えた「朗読ワークショップ」、朗読会などの関連イベントを実施しました。会期中の総来場者数は974人でした。展示会の来場者からは、八重山出身者に焦点を当てた展示が戦争やひめゆりの生徒たちを身近に感じるきっかけになったことや、戦争をしないために沖縄戦を知るべきだといった感想が寄せられました。イベント参加者の感想にも、八重山出身のひめゆり学徒の存在を初めて知ったことや、沖縄戦を伝えることの大切さ、イベントの継続開催を望む声などがあり、地域で伝える意義を改めて感じる展示会となりました。

本展示会の開催にあたってご協力いただいた共催館の八重山平和祈念館の皆さま、ご後援いただいた石垣市、竹富町、与那国町をはじめ関係機関の皆さま、そして八重山出身のひめゆり同窓生、ご家族、ご遺族の皆さまに厚く御礼申し上げます。

※本事業は「令和7年度沖縄文化芸術の創造発信支援事業」の採択事業です。



朗読会は八重山出身のひめゆりの生徒の戦争体験を朗読で追体験する場となった



オープニングセレモニーで館長の解説を聞く来場者



中学生も参加し取り組んだ「学芸員によるワークショップ」

CONTENTS 目次

- ◆ 戦後80年移動展 ひめゆりと八重山 開催 01
- ◆ トピックス 02
- ◆ 資料館の動き 03
- ◆ 戦後80年移動展 ひめゆりと八重山 開催報告 04
- ◆ ここに注目 師範学校生に支給された「官費」一前編 08
- ◆ 2025年度博物館実習生レポート 12
- ◆ 仲宗根政善日記抄(71) 14
- ◆ 本棚(仲程昌徳) 15
- ◆ お知らせ 16

■新代表理事就任のお知らせ

2025年6月11日付をもちまして、当財団代表理事の仲程昌徳が退任し、後任として普天間朝佳が就任いたしました。なお、新代表理事の普天間は、これまで通り館長職も兼任いたします。新体制のもと、より充実した資料館活動を目指してまいります。

■ひめゆりの塔慰霊祭開催

2025年6月23日、「ひめゆりの塔慰霊祭」を挙行しました。戦後80年の節目となる今年は、昨年よりも多い約250人が参列しました。ひめゆり同窓生の参列は約10人でした。

慰霊祭に先立ち、糸満市戦後80年事業の一環として、糸満市内の中高校生約50人で結成された「糸満市戦後80年平和祈念合唱団」が、ひめゆりにゆかりのある「別れの曲」や女師・一高女の「校歌」、MONGOL800の「himeyuri～ひめゆりの詩」の3曲を披露しました。ひめゆり同窓生の皆さんと、生徒たちの合唱に合わせて歌い涙ぐむ姿が見られました。

亡くなつたひめゆり学徒のごきょうだいもご高齢となっていますが、「この日だけは」とご家族と一緒に参列する姿もありました。



別れの曲を歌う元ひめゆり学徒



歌声と演奏を披露した合唱団のみなさん

■2025年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」開催

7月17日より、第6展示室にて2025年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」を開催しています。

展示されているのは、元ひめゆり学徒の体験に基づく8点の絵です。常設展示ではひめゆり学徒隊の全体像を伝える絵を展示していますが、この企画展では、体験者ひとりひとりの記憶に残るできごとを絵で表現しています。

来館者は、絵を指さしたり、意見交換をしながら、じっくりと眺めています。会期は終了しましたが、好評のため12月14日まで延長しています。



2025年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」会場

■高校生・大学生による展示ガイド実施

当館は、高校生が沖縄戦を伝える側になってみることをめざして、今年5月、沖縄県立向陽高校の生徒有志を対象に「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を行いました。その参加者を中心に、高校生22人、大学生2人が、7月22日、28日、9月6日の3日間にわたり、第6展示室で展示ガイドを実施しました。

「初めは緊張してなかなか自分からガイドを出来なかった」、「自分がこの絵を通して伝えたいことが、うまく伝わっていないように感じてもどかしかった」という生徒たちも、「自分なりにガイドできるようになった」、「たくさん的人が『よかったよ、勉強になったよ』と言ってくれて、やってよかったと思った」と言います。さらに、「沖縄戦について知らないことがたくさんあるとわかった」「お客様の質問や感想で気づかされることが多かった」との意見もあり、伝える経験を通して、生徒たちは沖縄戦についての理解を深めていきました。



来館者に展示ガイドを行う高校生 2025年7月28日

■「沖縄・平和と人権博物館ネットワーク」創設

2025年2月9日、県内の平和や人権をテーマとする8つの博物館（ヌチドウタカラの家、沖縄愛楽園交流会館、佐喜眞美術館、不屈館、対馬丸記念館、南風原文化センター、沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館）が集まり、「沖縄・平和と人権博物館ネットワーク」を創設しました。本ネットワークは、8館で連携・交流をおこない、平和と人権の大切さを発信していくことを目的としています。

戦後80年の今年は、県の事業の一環として、7月6日に第1回シンポジウムを開催し、8館の特徴や取り組みを紹介し、課題について話し合いました。10月12日の第2回シンポジウムでは、若い世代と平和ミュージアムの連携について話されました。そのほかにも、加盟館をめぐるバスツアーやスタンプラリーなどの取り組みをおこなっています。



8館の代表が集った第1回シンポジウム

■資料館の動き（2025年5月～2025年11月）

2025年

- 5月13日 西田昌司参議院議員が、5月3日の憲法シンポジウムで、ひめゆりの塔の説明を「歴史の書き換え」等と発言した件で、沖縄県議会の議員勉強会に館長の普天間が招かれ、発言に対する当館の見解を説明した。
- 5月24日 沖縄戦の史実歪曲を許さず沖縄の真実を広める首都圏の会主催（共催：沖縄平和ネットワーク首都圏の会）「戦後80年一戦争体験をどう引き継ぐか!? ひめゆり平和祈念資料館のこれまでとこれから」（於：東京都）に館長の普天間朝佳が登壇
- 6月22日 糸満市戦後80年平和祈念事業の「平和イベント」にて館長の普天間朝佳が平和講話をおこなう
- 6月23日 ひめゆりの塔慰靈祭挙行。午後、石破茂前首相が来館
- 7月 6日 沖縄県主催沖縄・平和と人権博物館ネットワーク 第1回平和シンポジウム「みんなで継承しよう 沖縄戦の記憶 沖縄のこころ－8館と一緒に考える－」（於 南風原町）に館長の普天間朝佳が登壇
- 7月8～9日 沖縄県立芸術大学「絵画特論II」の集中講座に講師派遣（講師：説明員 尾鍋拓美）
- 7月22日・28日 2025年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」の展示を使った向陽高校生によるガイド実施
- 7月23日 「沖縄県地域史協議会第1回研修会」（於：与那原町）に説明員の尾鍋拓美が参加
- 7月29日 「沖縄県修学旅行推進協議会平和学習分科会」に説明員の仲田晃子が出席
- 8月 1日 八重山平和祈念館にて、「ひめゆり平和祈念資料館 戦後80年移動展 ひめゆりと八重山」開幕。オープニングセレモニーを開催
- 8月 2日 「ひめゆりと八重山」関連イベント「学芸員によるワークショップ」を実施。学芸員の前泊克美が講師を務める（於：八重山平和祈念館）
- 8月 5日 沖縄県主催ウチナージュニアスタディツアーハウス受入
- 8月14日～31日 夏休み企画としてガイダンスを実施（計15回）
- 8月23日 「ひめゆりと八重山」関連イベント「朗読ワークショップ」を実施（於：八重山平和祈念館）。琉球放送アナウンサー 仲村美涼氏、與那嶺啓氏が講師を務める
- 8月24日 「ひめゆりと八重山」関連イベント「朗読会」開催（於：石垣市役所1階市民広場）
- 9月 6日 2025年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」の展示を使った大学生・高校生による展示ガイド実施
- 9月 8日～12日 博物館実習生受け入れ（徳島大学 藤川華杏さん）
- 9月13日 沖縄県平和祈念資料館主催「令和7年度沖縄戦の語り継ぎ手養成事業」（於：糸満市）第6回講座の講師を館長の普天間朝佳が務める
- 9月14日 糸満市戦後80年平和祈念事業の一環として「ひめゆりを伝えるワークショップ」（於：当館多目的ホール）を実施。学芸員の前泊克美が講師を務める
- 9月20日 「沖縄戦の記憶継承プロジェクト－戦争をしない/させないために」（同プロジェクト主催・於：琉球新報社）第3期10回目の講師を館長の普天間朝佳が務める
- 10月 4日 沖縄首里ロータリークラブ主催（共催：沖縄大学）映画「ひめゆり」上映会（於：沖縄大学）のトークセッションに学芸課長の古賀徳子が登壇
- 10月 5日 NPO法人塗魂ペインターズ全国会議にて館長の普天間朝佳が講演
- 10月12日 沖縄県主催沖縄・平和と人権ネットワーク 第2回平和シンポジウム「次世代へつむぐ沖縄のこころ」（於 南風原町）に学芸課長の古賀徳子が登壇。館長の普天間朝佳が参加

戦後80年移動展 ひめゆりと八重山 開催報告

学芸課 前泊克美

ひめゆり平和祈念資料館付属ひめゆり平和研究所は、今年の8月1日（金）から8月31日（日）まで、石垣市の八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館分館）との共催で「ひめゆり平和祈念資料館 戦後80年移動展 ひめゆりと八重山」を開催した。県内での移動展は、今帰仁、読谷、久米島に続いて4か所目となる。移動展には、ひめゆり学徒隊のことを伝え、地域のひめゆりの生徒の存在を通じて、より関心を高めたいというねらいがあった。

ひめゆりの学校（沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校）には八重山出身の生徒が多く在籍した。沖縄戦でも、ひめゆり学徒隊として、八重山出身の生徒15人と教師2人が動員され、うち9人が死亡した。本移動展では、八重山出身者に焦点を当て、ひめゆり学徒隊全体の戦争体験に加えて、八重山出身者についてのエピソードや生き残った生徒たちが帰郷後にたどった戦後の歩みを伝えた。八重山では、沖縄戦の記憶として地域の「戦争マラリア」の体験が主に語られてきた。本展示会では、ひめゆり学徒隊の体験を通して、八重山地域で地上戦の実相を伝えたいという目的もあった。

なお、本移動展は沖縄県、沖縄県文化芸術振興会の支援を受け実施している「“ひめゆり”を伝えるワークショップ開発・実践プロジェクト」の一環であり、展示を活用したワークショップや朗読会をあわせて開催した。



八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館分館）

1. 概要

- 展示会名：ひめゆり平和祈念資料館 戦後80年移動展 ひめゆりと八重山
- 開催期間：2025（令和7）年8月1日（金）～8月31日（日） 休館日除く28日間
- 会 場：八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館分館） 第2展示室
- 主 催：公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団
- 共 催：八重山平和祈念館（沖縄県平和祈念資料館分館）
- 展示内容：「ひめゆりの沖縄戦」「八重山出身のひめゆりの生徒たち」（当館制作）
　　上映映像「生き残ったひめゆり学徒たち」「アニメ ひめゆり」（当館制作）
　　「八重山の学徒たち」（八重山平和祈念館制作）
- 後 援：石垣市、竹富町、与那国町、石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会
- 支 援：沖縄県、沖縄県文化芸術振興会（令和7年度沖縄文化芸術の創造発信支援事業）
- 来場者数：合計974人（内訳：大人741人 小人233人）
- 報 道：新聞報道7回、テレビ報道4回、ラジオ放送（特集）1回

2. 展示・図録制作

石垣市の開催にあたり、八重山出身者に焦点を当てた展示を制作することを決定し、八重山出身者に関するコラム7点と、18人の教師・生徒の紹介を作成した。証言を読み直し、関連文献や資料の収集を行い、関係者への聞き取りや提供資料なども参照しながら学芸課職員で分担して執筆を進めた。八重山出身の元証言員仲里正子さん、知念淑子さんに、学校生活や戦争中の状況、学友についてなど聞き取りを行った。限られた文字数に収めるため、エピソードを絞り文章を読み合わせてわかりやすくするなど、検討と推敲を重ねてテキストを作成した。あわせて、使用する写真やイラストの選定を行い、新規図表も制作した。縦長のパネルの限られたスペースに収め、かつ見やすいものにするため、デザイナー花木豪さんと調整を重ね、全体のデザインを作り上げた。

八重山出身者に焦点を当てた展示を制作するのは初めてのことだが、制作を通して、八重山出身者の置かれた状況や、ひとりひとりの行動、戦争体験、心情などを改めて捉え直す貴重な機会となった。

さらに、展示会の記録を残すことを目的に図録を発行し、当館と朗読会会場にて販売した。八重山出身者の沖縄本島での地上戦体験をまとめた資料があまりなく貴重だということもあり、地域の学校・公共図書館、教育関係者からまとめて60冊の購入があった。図録は、当館にて2026年2月28日まで期間限定販売を行う。



八重山出身者の展示



展示内容を収録した図録

3. 事業について

（1）展示会

28日間で974人の来場者があった。県外から観光で訪れた方や地域の方々が多く来場した。かつて八重山地域で教壇に立っていた

元ひめゆり学徒の教え子も駆けつけた。アンケートには、八重山出身者に焦点を当てたことでより身近に感じた、改めて戦争の恐ろしさを知る機会になったなどの感想が寄せられた。また、共催館・八重山平和祈念館とは密に連絡を取りながら企画を進めた。職員の皆さんのきめ細かい対応のおかげで、展示設営やイベント運営などを円滑に進めることができた。

【来場者感想】八重山出身の方が残した証言がとても心に残った。(30歳・女性)／八重山出身の方に焦点があてられた移動展は、より戦争を身近に感じるきっかけとなりました。(41歳・女性)／身内(おば)がひめゆりの生き残りでした。又中学生の時ルリ先生からたくさん話を伺うことができました。今の時代にも起こりうるのではないかと思いました。(72歳・女性)



親子で見学する来場者

(2) 関連イベント

①オープニングセレモニー	2025年8月1日(金) 13:00-15:00	八重山平和祈念館	51人
<p>*ご来賓：竹富町副町長山城秀史氏、竹富町教育長佐事安弘氏、与那国町教育長寺村有美恵氏 開会にあたっては、当館館長普天間朝佳による主催者挨拶、八重山平和祈念館分館長親盛剛氏による共催者挨拶が行われ、その後、普天間と展示担当職員尾鍋拓美がギャラリートークを実施した。石垣市在住の元ひめゆり学徒川平カツさんがご家族とともに来場されたほか、東京や沖縄本島からの参加者も見られた。参加者は熱心に耳を傾け、メモを取る姿も見られ、展示会への関心の高さがうかがえた。</p>			
 <p>ギャラリートークの様子</p>  <p>ご家族と参加した生存者の川平カツさん</p>			

②学芸員によるワークショップ	2025年8月2日(土) 13:00-15:00	八重山平和祈念館	13人
<p>*講師：ひめゆり平和祈念資料館学芸員 前泊克美 沖縄戦当時の写真や、学徒の証言をもとに描かれたイラストを題材にしたワークショップを実施。中学生から70代まで幅広い世代が参加した。 特に、八重山出身のひめゆり学徒に関する内容を中心に取り上げ、八重山出身者の証言をもとにしたイラストを使ったワークを行った。描かれた場面の状況や登場人物の心情を想像しながら、グループごとに意見を出し合い、タイトルをつけた。アダン林で女性たちが車座になり、中央の人物が刃物を持っているイラストには、「生と死の決断」というタイトルがつけられた。担当したグループは「自決をしようとしている場面だと考えた」と話しつつ、「でも、きっと思いとどまって、みんな生きたのではないかと思う」と希望を込めて語った。 発表後、学芸員による解説を行い、八重山出身者の戦争体験や心情について紹介した。参加者からは、「八重山出身の方々がどんな思いで、どんな体験をしたのか、よりつながりを持って考えることができた」「自分の気持ちや考えを他の人と共有できた」などの感想があった。</p>			
 <p>イラストを囲んで熱心に話し合う参加者</p>			

【参加者感想】学校で学んだ以上にひめゆり学徒隊のことや戦争の悲惨さについて学ぶことができた。(14歳・女性)／学校などでもぜひこのような取り組みをしてほしい(42歳・女性)／ひめゆりの歴史も、さらに学んで、若い人びとに伝えていくにはどうすればいいか、自分に何ができるか、考え、行動していきたい(75歳・女性)

③朗読ワークショップ	2025年8月23日(土) 13:00-16:00	八重山平和祈念館	24人
------------	---------------------------	----------	-----

*講師：琉球放送アナウンサー仲村美涼さん、與那嶺啓さん

*トークセッション登壇者：慶田盛みき子さん、当館学芸員前泊克美

*プログラム：①講師によるレクチャー ②トークセッション ③グループワーク ④発表練習

八重山出身のひめゆり学徒の手記や証言の朗読を通して沖縄戦の理解を深めることを目的に、朗読ワークショップを実施した。

ワークショップの内容は、琉球放送仲村美涼さんと一緒に検討を行い、朗読会との連動企画として、参加者代表が朗読会で読み手を務めることとした。

プロによる直接指導の機会とあって、中高校生や地域の朗読の会のメンバーなど多様な参加者が集まった。はじめに仲村さんから琉球放送の平和朗読会の実践が紹介され、自身の経験を踏まえ、題材の背景を知り登場人物の心情を理解すること、情報や知識をインプットしたうえでアウトプットすることの重要性が説かれた。トークセッションには、ひめゆり学徒隊生存者川平カツさんの長女慶田盛みき子さんと、当館学芸員前泊が登壇した。慶田盛さんは、母カツさんの人柄、師範学校への志望理由や戦争体験、カツさんの平和への思いなどを語り、前泊はひめゆり学徒隊の概要や八重山出身の生徒たちのエピソード、心情などを紹介した。その後のグループワークでは、講師の指導のもと、ひめゆりの生徒たちの置かれた状況や気持ちを想像しながら意見を交わし、戦争中の語句の意味を調べたり、展示を見たり、学芸員に質問したりすることで理解を深め、発表に向けて表現の工夫を重ねた。

参加者の感想からは、朗読やひめゆり学徒隊に関する基礎的な情報を得た上で声による表現を試行錯誤する過程を通じて、参加者が主体的に学び、当時の状況や思いを想像し、自分が伝える側になるという自覚を持つことにつながったことがわかった。



トークセッション。左から與那嶺啓さん、前泊、慶田盛みき子さん、仲村美涼さん



グループワークでは活発に意見が交わされた

【参加者感想】 沖縄戦はマラリアと思っていたのですが「ひめゆり」という沖縄戦もあるということを初めて知りました。
 (中学生・女性) / 本当に壮絶な時代を生きてたんだなと感じました。これからもひめゆりのこと、そして学徒さんたちの思いを語り継いでいきたいと思いました。(高校生・女性) / 手記やお話を聞いたり見たりして戦争についての理解や想像が深まった感じがしました。(高校生・女性) / 展示がとても良かったです。朗読内容を深める手助けになりました。(40代・女性) 体験者の手記を通して、自分が伝える側になったときに、より、深く、当時の状況や思いを感じることができました。(50代・女性) / ワークショップをたのしみに来たのですが、八重山のひめゆりのこと、沖縄戦争のことをたくさん学べて本当によかったです。(60代・女性)

④朗読会	2025年8月24日(日) 13:00-16:00	石垣市役所市民広場	後援：石垣市	約90人
------	---------------------------	-----------	--------	------

*出演：琉球放送アナウンサー仲村美涼さん、與那嶺啓さん、朗読ワークショップ参加者代表8人、いしがき少年少女合唱団
 ひめゆり学徒の沖縄戦の記憶を朗読で伝えることを目的に朗読会を開催した。朗読ワークショップとの連動企画として位置づけ、ワークショップ参加者の代表8人(中学生2人、高校生3人、大人3人)と、琉球放送アナウンサー仲村美涼さん、與那嶺啓さんが読み手を務めた。

会の冒頭で、いしがき少年少女合唱団がひめゆりにゆかりのある「別れの曲」を含む3曲を披露した。八重山出身のひめゆり学徒と教師、遺族の証言・手記計10編の朗読を通して、学校生活、1944年の八重山への帰省、帰校命令を受けた際の葛藤、過酷な戦争体験、帰郷、戦後の遺族の思いを追体験する場となった。

来場者の反響も大きく、終了後、直接感想を伝えたいと声をかけてきた方が何人もいた。また、ワークショップ参加者にとっても、「朗読会」とい



いしがき少年少女合唱団の歌声でスタートした

う発表の場を設けたことで、学んだことを実践できる機会となった。

開催に際しては、石垣市市民保健部平和協働推進課、いしがき少年少女合唱団の皆さんに多大な協力をいただいた。

【来場者感想】展示、資料だけではなく、声を伝える朗読、次世代に継承していく大切さを感じました。(50代・男性)／心に、ささるというか、ひびく朗読でした。(50代・女性)／実際の戦争を知らなくても「映像・音声」で語り継ぐ努力が平和を築くことになると思います。(60代・女性)

【発表者感想】当事者の気持ちを想像して、その立場になって考えられた。／話を聞いて、戦時中の情景が想像できて、想像できたらこそ朗読に落とし込めた。情景をインプットすることの大切さを学べた。／ひいおばあちゃんの思いを受け継いで話してよかったです。これだけつらい思いをして生きたんだということを感じた。今後も伝えられたらいいなと思う。(RBCラジオ「ジ・アナウンサーズ」)
2025年11月3日放送より)

*朗読はRBCのホームページ内「RBCアナウンサー平和朗読会」
(<https://www.rbc.co.jp/heiaroudokukai/>)にて聴取可能



中学生2人が川平カツさんの学校生活の思い出を読み上げた



宮良ルリさんの証言を朗読する仲村美涼さん



朗読発表メンバーと生存者川平カツさん

(3) 元ひめゆり学徒関係者との新たな関係構築

本移動展の開催にあたっては、八重山出身の元ひめゆり学徒の家族・遺族をはじめ多くの関係者の協力があった。展示会や関連イベントに積極的に来場し、沖縄本島や本土在住の方々が周囲への広報に尽力するなど、移動展の成功を願っての心強い支援があった。ひめゆり同窓生など関係者への聞き取り調査も実施することができ、さらに、女師・一高女の卒業アルバムなど新たな資料の提供も受けた。また、「これを機に母の残した資料を整理したい」「八重山のひめゆりの二世、三世の世代で何か取り組みができるか」という声が聞かれたことも嬉しいことだった。本展示会が契機となって生まれた新たなつながりを、今後も大切に継続していきたい。

(4) 成果と課題

展示会および各イベントのアンケート結果や参加者の反応、学校現場などの将来的な図録活用の可能性も含めて、八重山地域でひめゆりの戦争体験や沖縄戦の実相を伝えるという目的において、大きな成果を上げることができたと考えられる。また、関係機関との協働の実現も成果のひとつと言える。

一方で、イベントへの中高校生の参加はあったが、展示会への子どもや学生の来場者数が少なかった。開催時期が夏休み期間中だったため、学校単位での来場が難しかったことが理由として考えられる。若い世代など幅広い層への来場を促すためには、より積極的な広報展開を行う必要があった。

4. まとめにかえて

今回の開催は、私たち資料館職員にとっても、八重山出身の生徒と教師ひとりひとりに向き合う貴重な機会となった。八重山出身の元証言員仲里正子さん、知念淑子さんは、故郷で展示会が開催されることを喜んでいた。地上戦のなかった郷里八重山で、ひめゆりの戦争体験を伝えて平和を訴えてほしいという思いは、八重山のひめゆりの生徒たちに共通する思いだったのではないかだろうか。

展示を見た関係者から、「亡くなった人たちが、私たちのことを忘れないでください、と言っているような、魂がやっと帰ってきたという感じがした」との感想があった。帰ってきた彼女たちの魂は、今の社会をどのように見つめているのだろうか。戦争を否定し平和を希求してきた元ひめゆり学徒、そして戦争で犠牲となったひめゆりの生徒たちの姿を忘れずに、伝え続けていくことの大切さを改めて実感する展示会となった。

ここに注目 師範学校生に支給された「官費」一前編

ひめゆりの学校¹に通う生徒たちのうち、師範学校の生徒たちには、国から学資金が支給されていました。生徒たちは、これを「官費（かんぴ）」と呼んでいました。就学には、教材費のほか、舍費（寮費）、被服費、お小遣いなどの生活費も必要です。官費は、生徒の就学を支えていました。いっぽうで、沖縄戦が近づくなか、生徒が家族とともに行動するか、学校と行動をともにするか、受給済の官費が、その選択に大きく影響しました。

沖縄師範学校女子部の生徒たちの思い出にたびたび登場する「官費」について、前後編の2回に分けて紹介します。前編では、彼女たちが残した証言や手記を確認しながら、主に昭和期の師範学校の官費制度についてみていきます。

※以下、ひめゆりの生徒たちの学校である、沖縄師範学校女子部（沖縄県女子師範学校）、沖縄県立第一高等女学校を、それぞれ「女師」「一高女」と略記する場合があります。

※当時の公文書などでは、「給費」「学資補助」等と表現されていますが、本稿では、当時の生徒たちの呼び方にしたがって、主に「官費」を使います。

※引用については、読みやすさを考慮し、カタカナはひらがなに、旧漢字は新漢字に、くの字点は該当する文字を補いました。また、改行は「／」で示しました。

師範学校生に支給された「官費」

師範学校は、戦前期の日本にあった小学校²の教員を養成するための学校です。すべて公立校³で、基本的には各道府県に男女各1校が設置されていました⁴。明治期の創設当初から、生徒の学資は学校が支給することが定められており⁵、公費から生徒に支給される学資金のことを、生徒たちは「官費（かんぴ）」と呼んでいました。かつて師範学校に通っていた生徒たちの記録には、しばしば官費にまつわる思い出が記されています。

官費があるから進学できた

当時の義務教育は、小学校の6年間です。義務教育で終える生徒も多いなか、進学を希望する生徒は、受験をして高等女学校や実業学校に進みました。進学しようとするときに問題になるのは、生徒の学力のみではありません。特に、就学にかかる費用が大きな障壁になる生徒は少なくありませんでした。1940（昭和15）年に沖縄県女子師範学校本科一部に入学した渡久山ハルさんは、家庭の経済状況のために女学校進学をあきらめ、師範学校に進むことに決めたといいます。

自分の家庭の経済状態では、六年生からの女学校進学はどうてい無理だとあきらめざるを得ませんでした。／六年生で女学校進学を果たせなかったとはいえ、進学の夢は捨てきれません。残るは沖縄県女子師範学校があります。その学校は授業料は免除で、官費という国からの学資補助もあるというのですから、それなら自分の家庭の経済状況でも進学は大丈夫だろうと思いました。そういうことで前にも書いた課外勉強には一層打ち込むようになりました。⁶

進学にあたってお金の心配したのは、ハルさんだけではありませんでした。1943（昭和18）年に予科に入学した末富文子さんは、小学校の教師の強い勧めで女師を受験し、みごと合格することができました。しかし、合格を伝えられた両親は、「イチデージ ナトウサ（大事になった）」と言って困ってしまったといいます⁷。県下で40人しか合格しない試験をパスした喜びではなく、お金の心配が先にたったようです。

師範学校では、官費の支給に加えて授業料も無料だったことから、高等女学校や実業学校に通うのに比べると、学資は少

1 「ひめゆり」は、戦前の沖縄にあった沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校のふたつの学校の愛称。両校は、同じ校舎にあり、行事をともに実施するなど、ひとつの学校のように運営されていた。

2 当時の初等教育学校の名称は、尋常小学校、または国民学校（1941年以降）。現在の小学校にあたる。

3 道府県立。1943（昭和18）年の制度改革で官立（國立）となった。

4 1943（昭和18）年3月の段階で、北海道、東京には4校、新潟、静岡、愛知、大阪、福岡には3校あった。

5 「師範学校令」1886（明治19）年公布、「第九条 師範学校生徒の学資は其学校より之を支給すべし」。

6 渡久山ハル『たどり来て七十路』私家版、2001年、p7-8。

7 ケイチャング「がじまる会『忘れ得ぬ人々』」、『がじまる会 創立50周年記念誌 1970-2020』、がじまる会創立50周年記念編集部員、2020年、p84。末富文子への聞き取り、2016年3月23日。

なくてすみませんでした。師範学校だから進学できた、という生徒はめずらしくありませんでした。

十分ではなかった官費

ハルさんが、「国からの学資補助」と記しているように、支給された官費は十分ではなく、補助的なものでした。ハルさんの同期生の石川幸子さんと富村都代子さんによると、官費は、月5円だったといいます⁸。仮に毎月支払われたとすると、年間60円の支給です⁹。

ハルさんが入学した年の学校要覧によると、女師本科一部の生徒が初年度（1年生の間）に必要な学資は、概算で 120 円 49 銭となっています。【資料 1】官費でカバーできるのは、半分程度です。2～4 年生の間に必要な金額は年 60 円前後ですが、5 年生になると 102 円の修学旅行の費用も必要でした¹⁰。就学には、家からの仕送りも不可欠でした。

【資料 1】女師・一高女生の就学にかかる費用—1940（昭和 15）年度

『昭和十五年度 沖縄県女子師範学校 沖縄県立第一高等女学校 沖縄県学校衛生婦養成所 一覧』(当館蔵) より。

就学にかかる費用の概算を示した表。女師と一高女、学年別に分けて記載されている。女師の本科一部は、5年間で475円78銭、二部は、2年間で240円95銭、一高女は、4年間で472円53銭かかることが示されている。

1941（昭和16）年の新入生からは、年間300円の官費が全員に支給されることになったが、それでも十分ではなかったとふり返る同窓生は少なくない。この表に記載されたもののほかに、寮生は、舍費（寮費）、日用品費、風呂代、お小遣いなどの生活費も必要だった。また、年々、舍費はあがり、さらに、1944（昭和19）年頃になると、支給の遅れなどもあった。お金の心配が募る生徒はめずらしくなかった。

公費生と私費生

生徒の学資は学校が支給することが定められていたとはいえ、先にみてきた通り、実際には、全ての生徒に十分な官費が支給されていたわけではありませんでした。師範学校の経費は地方行政（道府県）に任されていたため¹¹、学校経営は地方財政の影響を受けており、その時々の状況によって、支給額や、支給対象となる生徒数に変動がありました。文部省の統計によると、沖縄県女子師範学校¹²では、1930（昭和10）年代以降は、学資が支給される公費生よりも、各自で学資を負担す

8 2006年2月14日、2006年3月6日の当館の資料委員会内の聞き取り。

9 1941（昭和16）年に、学校から生徒の父親宛に出された学資金支給の通知文書【資料3】には、8月分は規定により支給しないことが記されている。また、1943（昭和18）年の「沖縄師範学校規定」にも同様の規定がある。このことから、1940（昭和15）年も、8月分は支給がなかつた可能性が考えられる。

10 修学旅行の費用は、入学した頃から積み立てが行われていたが、女師は1938（昭和13）年、一高女は1939（昭和14）年を最後に、修学旅行は行われなくなった（『ひめゆり一女師・一高女沿革誌一』沖縄県女師・一高女同窓会、1987年、p 220、334ほか）。沖縄戦当時、在校生だった世代の同窓生たちは、積み立てていたお金はどこに行ったのか、とたびたび疑問を口にしていた。

11 「師範学校令」1897（明治19）年公布、「第四条 高等師範学校の経費は国庫より尋常師範学校の経費は地方税より支弁すべし」、「第五条 尋常師範学校の経費に要する地方税の額は府知事県令其予算を調整し文部大臣の認可を受くべし」、「師範教育令」1897（明治30）年公布、「第四条 師範学校の経費 北海道及沖縄県を除く は府県税又は地方税の負担とす」。

12 師範学校が官立（国立）になった1943（昭和18）年度以降は、学校名が「沖縄師範学校女子部」となった。

る私費生が多かったことがわかります。【資料 2】私費生の増加は全国的なもので、不況を背景に地方財政が悪化した影響でした¹³。また、公費生への給費も段階的に減額されていきます。給費は、食費補助金として支出されていましたが¹⁴、公費生に支給された給費額も、生徒が必要な学資金に対してあまりにも少ないものでした。

【資料 2】沖縄県女子師範学校本科の公費生と私費生の割合と給費額（1927 年～1940 年）

文部省普通学務局 編『師範学校ニ関スル調査』（国立国会図書館蔵、大空社 1987 年刊行復刻版）

より作成。各年 4 月 30 日現在。

・師範学校の本科には一部と二部があった。一部は、小学校の高等科を卒業後に入学できる 5 年制のコース、二部は、高等女学校卒業後に入学できる、2 年制のコースだった。1943（昭和 18）年に

制度が変わり、一部は、予科（3 年）

と本科（2 年）で合わせて 5 年間学ぶコース、二部は、本科で 2 年間学ぶコースに改編された。

・『師範学校ニ関スル調査』は、1941（昭和 16）年以降は行われていないものと考えられている。ほかに公費生、私費生の数がわかる資料は、現在のところ確認できていない。

	本科一部					本科二部				
	全生徒数	公費生	私費生	公費生の割合	公費生の給費額	全生徒数	公費生	私費生	公費生の割合	公費生の給費額
1927（昭和2）年	221	221	0	100%	5.00円	30	30	0	100%	3.00円
1928（昭和3）年	216	226	0	100%	4.00円	30	30	0	100%	3.00円
1929（昭和4）年	207	207	0	100%	4.00円	30	30	0	100%	3.00円
1930（昭和5）年	188	188	0	100%	4.00円	30	15	15	50%	3.00円
1931（昭和6）年	163	158	5	97%	3.50円	20	10	10	50%	2.50円
1932（昭和7）年	137	127	10	93%	3.00円	38	10	28	26%	2.00円
1933（昭和8）年	115	100	15	87%	3.00円	39	0	39	0%	—
1934（昭和9）年	91	70	21	77%	3.00円	40	0	40	0%	—
1935（昭和10）年	74	47	27	64%	3.00円	41	0	41	0%	—
1936（昭和11）年	75	46	29	61%	3.00円	41	0	41	0%	—
1937（昭和12）年	81	26	55	47%	2.00円	40	0	40	0%	—
1938（昭和13）年	89	26	63	41%	2.00円	43	0	43	0%	—
1939（昭和14）年	112	26	86	30%	1.80円	78	0	78	0%	—
1940（昭和15）年	143	26	117	22%	1.80円	125	0	125	0%	—

1940 年の本科一部新入生に年約 60 円支給

全国的に師範学校の入学希望者が減少し続けていたことや、教員の需要の増加などを背景に、1940（昭和 15）年の本科一部入学生に学資を支給する経費として、あらたに、国からひとり当たり 60 円の補助金が各道府県に交付されました¹⁵。この年は、のちにひめゆり学徒隊として沖縄戦に動員された女師の最上級生が入学した年です。この年に本科一部に入学した石川幸子さんは、官費は、私たちのときから月 5 円だった、と振り返っています¹⁶。

1941 年の新入生全員に年 300 円支給

1941（昭和 16）年の新入生を対象に、国から一律、年間 300 円の官費が支給されることになりました。全国の師範学校の新入生全員が対象で、一部生、二部生問わず、毎月 25 円が支給されました。【資料 3】

一番有難かったのは、私達の入学した年から奨学金制度が始まり、毎月二十五円ずつ支給された事である。支給日になると「二部一年生は、四時までに事務室に給付金を取りに来るよう。」との放送があり、なんだか偉くなったような気がして、ついうれしくなったものである。¹⁷

この制度が導入される前に入学した生徒たちは、一律 300 円の給費制度の対象外でした。しかし、文部省は、この制度を導入するにあたり、もともと地方費で支払う予定だった給費の余剰金を当てるなどして、上級生への給費を増額をするよう、県知事に通知しています¹⁸。上級生への給費について、沖縄の師範学校ではどのように対応したのか詳細はわかっていないが、前年に本科一部に入学した富村都代子さんは、最初 5 円だった官費は、在学中に 12 円 50 銭に上がったとふりかえっ

13 逸見勝亮『師範学校制度史研究』北海道大学図書刊行会、1991 年。主に第一章。

14 『沖縄日報』1936 年 11 月 18 日、「男女両師範学校の食費補給金を減額／専攻科 6 円、一部 2 円に」（沖縄県教育庁文化財課史料編集班 編『沖縄県史 資料編 25 女性史新聞資料 大正・昭和戦前編 女性史 2』沖縄県教育委員会、2015 年、p653-654）ほか。

15 文部省普通学務局長通牒「師範教育費及小学校教育費補助に関する件」1940 年 3 月 30 日、『文部時報』686 号、p47。『日本近代教育百年史 5』国立教育研究所、1974 年、p1345-1346。『昭和十五年度沖縄県歳入歳出決算報告書』1941 年、p34。

16 2006 年 2 月 14 日、資料委員会内での聞き取り。

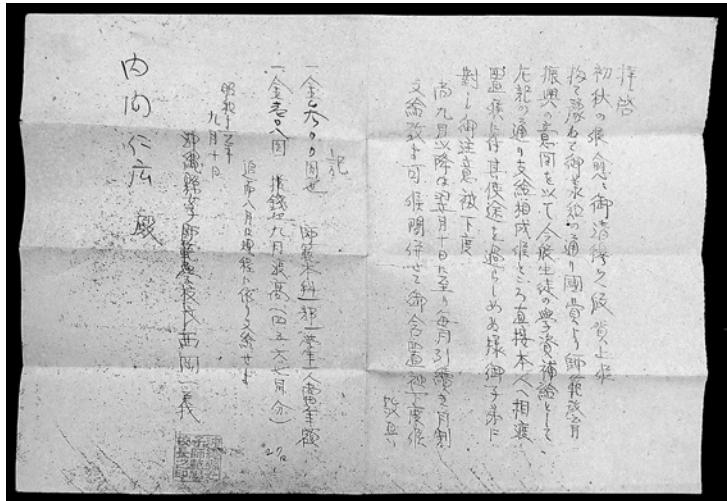
17 友寄静子「“ひともの花”」、『ひめゆり一女師・一高女沿革誌』1987 年、p566。

18 文部省普通学務局長通牒「師範学校生徒給費増額支給に関する件」1941 年 3 月 4 日、『自治機関』第 494 号、1941 年 4 月 5 日、p53-54。

ています¹⁹。先に入学していた生徒たちも、在学中に官費の支給が増えていたことがわかります。

【資料 3】学校長から生徒の父親宛てた学資支給の通知 1941 年 9 月 10 日

学校長名で、内間シマ子（1941 年女師本科一部入学）の父、内間仁廣に宛てた学資金支給の通知（当館蔵）。「拝啓／初秋の候愈々御清穆之段賀上候／偕て豫ねて御承知の通り國費より師範教育／振興の意図を以て今般生徒の學資補給として／左記の通り支給相成候ところ直接本人へ相渡／置候に付其使途を過らしめぬ様御子弟に／對し御注意被下度／尚九月以降は翌月十日に至り毎月引續き月割／支給致す可候間併せて御含置致下度候／敬具／記／一、金參〇〇圓也、師範本科一部一學年一人當年額／一、金壱〇八圓 捨錢也、九月渡高、（四、五、六、七月分）／追而八月は規定に依り支給せず／昭和十六年／九月十日／沖縄縣女子師範學校長西岡一義／内間仁廣殿」



卒業後に課せられる服務義務と就職義務

師範学校の生徒には、卒業後、在学期間の二倍に相当する期間、小学校などに務める義務（服務義務）と、卒業直後の一間は、県知事が指定する学校に就職する義務（就職義務）がありました²⁰。勤務校の希望を出すことは可能で、卒業を間近にした生徒たちは、どの学校を希望するのかを話題にしていました。母校など、自宅から通うことができる学校を希望する生徒が多かったようです。都市部出身の生徒は、希望者が少ない地方の学校に配置されることもありました。²¹

この服務義務と就職義務は、官費制度とセットになっています。師範学校をやむを得ない理由以外で退学した場合や、服務義務と就職義務を果たせない場合は、授業料と受給した官費を返還することが定められていました²²。沖縄師範学校では、返還することになった場合の授業料の返還額を、年額 80 円と定めています²³。これとは別に、官費も返還することになります。

主要参考文献

- 逸見勝亮『師範学校制度史研究』北海道大学図書刊行会、1991年
- 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 5』国立教育研究所、1974年
- 久保義三、米田俊彦、駒込武、児美川孝一郎編『現代教育史事典』東京書籍、2001年

説明員 仲田晃子

19 富村は、金額があがったのは、1943 年に師範学校が官立（国立）に移行した後、としていたが、現段階では、官費の金額があがった具体的な時期については、検討の余地がある。また、これまで官費の支給がなかった生徒（私費生）にも、官費が支給されるようになったのかなど、官費支給の実態については、さらなる調査が必要である。

20 「師範学校規定」1943 年 3 月 8 日、文部省令第 6 号。「第四十七条 師範学校を卒業したる者（以下卒業者と称す）は卒業証書を授与せられたる日より在学期間の二倍に相当する期間国民学校又は国民学校に準すべき学校の職員の職務に従事するの義務（以下服務義務と称す）を有す但し第四十八条に規定する義務を了りたる者は教育に関する他の職務に従事することを得/第四十八条 卒業者は卒業証書を授与せられたる日より一年間当該師範学校の所在地を管轄する地方長官（以下学校所在地の地方長官とす）の指定に従ひ就職するの義務（以下就職義務と称す）を有す」（文部省『教育関係法令要覧』1943 年、p345）

21 1944 年 12 月 10 日に、渡嘉敷良子が母親に宛てて書いた手紙（当館蔵）には、「そろそろ皆自分の配置校の話が持出されます。自分は今の所今帰仁校にしようかと思っています。天底は久田さんが希望してみます。」と記されており、12 月頃には生徒たちの間で勤務校の希望が話題になっていたことが伺える。勤務校の希望に関する記録はほかに、本村つる『ひめゆりにさゝえられて』私家版、2016 年、p40。

22 「師範学校規定」1943（昭和 18）年 3 月 8 日、文部省令第 6 号。「第四十五条 第四十条の規定に依り退学を命ぜられたる者又は自己の便宜に依り退学したる者は授業費及給与せられたる学資を償還すべし但し文部大臣に於て情状に依り其の全部又は一部の償還を免除したるときは此の限りに在らず 償還すべき授業費の金額は文部大臣の認可を受け学校長之を定む。」

23 「沖縄師範学校規則」1943（昭和 18）年 4 月 1 日適用、「第十九条 師範学校規定第四十五条の規定に依り償還すべき授業費は年額金八拾円とす」。翌年の改正で、年額が 100 円、月割 8 円 50 銭となった（「沖縄師範学校規則改正」1944（昭和 18）年 4 月 1 日適用）。

2025年度博物館実習生レポート

2025年9月8日から9月12日まで博物館実習を実施し、徳島大学総合科学部の藤川華杏さんを受け入れました。藤川さんは、中学生の頃当館を訪れたことをきっかけに、ひめゆり学徒隊や沖縄戦について関心を持つようになり、その後も高校や大学で学びを深めてきました。実習期間中も、中学生の頃に当館で体験したことの大半にしている様子が伝わってきました。熱心に、そして生き生きと楽しそうに実習に取り組む姿が印象的でした。

今回のレポートでは、来館者が何度でも足を運びたくなる方法や、ひめゆり学徒隊の沖縄戦についてより深く想像を促し、記憶に残してもらうための工夫などを提言してくれました。

実習生
レポート

ひめゆり平和祈念資料館に提案したいひめゆりを記憶してもらうための方法

徳島大学 総合科学部 藤川華杏

1 はじめに

今回の博物館実習を機にひめゆり平和祈念資料館へ伺いましたが、これが私にとって人生で二回目の資料館への訪問となりました。そこで気づいたのは、初めて資料館を訪れた時の学びの内容がおぼろげになっていたこと、そして、二

度目ここに来てみて新たな発見やより深い理解が得られたということです。このことから、資料館に何度でも足を運んでもらえるような仕組みが必要なのではないかと考えました。

2 タイムカプセルプロジェクト

そこでまず提案させていただきたいのは、来館者の方に三年後の自分に宛てて手紙を書いてもらうというタイムカプセルプロジェクトです。資料館を見ての感想や、未来に向けてのメッセージを記入してもらい、三年後に本人のもとへお届けするというシステムになります。私自身このタイムカプセルの要領で自身に手紙を書いたことがあります、読む

頃には書いた時のことを全く忘れており、記憶がいかに不確かなものであるかということを認識させられました。自分に宛てた手紙を来館者の方に書いてもらい、三年後に読んでいただくことで、ひめゆり平和祈念資料館のことを思い出し、次に沖縄に訪れる際に資料館に足を運んでもらえるきっかけになるのではないかと考えました。

3 想像を補助し記憶するための工夫について

実習を通じてもう一点感じたのは、戦争非体験者は想像という行為を通じて展示を見ているということです。展示を一通り見終わった後の私の頭の中には、目で見た展示物の情報だけではなく、証言に書かれていた情景や壕の中での生活など、私自身が想像した映像情報も残っていました。これは、今後の戦後世代が沖縄戦という自らが経験していないものを記憶していくために非常に重要なポイントなのでないかと考えました。

そこで提案させていただきたいのは、その想像を補助するための情報をあちこちに散在させることです。2021年のリニューアルで導入されたイラストの展示は、私が当時の風景を想像するための大きな助けとなりました。そのような細かな情景のイラスト展示をさらに増やすということは、戦争非体験者の想像力を刺激することにつながると思います。また県外出身者である私にとって、沖縄の特有の植生や地理などが想像しづらく、そして証言に登場した青酸カリや蛆、

ガス壊疽についても馴染みがなかったため、想像が難しかつたと感じました。既存の展示内に登場する文言に、さらに詳しい説明やその写真をつけていただけだと、より想像の範囲を広げることができるのでないかと考えました。そして、実習中に沖縄戦に関する他施設で説明を聞いた壕の中の患者の声や、体験した壕の中の匂い、ガマの中の暗さはとても印象に残っています。これらの五感にうつたえかける情報は、沖縄戦当時の情景を一步踏み込んで想像するために非常に重要な役割を果たしました。これと似たような体験がひめゆり平和祈念資料館の中でも可能になれば、来館者の方

がひめゆり学徒隊たちの見ていた世界を追体験することにつながるのではないかと感じました。

ただ、ひめゆり平和祈念資料館では当時の状況を再現した展示を行う場合、元ひめゆり学徒隊の方々と議論・推敲を何度も重ねるという作業を欠かさないと伺いました。今回はひめゆり平和祈念資料館への提案ということで、私が思うがままの提言をさせていただきましたが、元学徒隊の方々にも大きな負担がかかってしまうことに配慮するということを忘れずにいたいと思います。

4 まとめ

一点目には、ひめゆり平和祈念資料館に何度も足を運んでもらうための方法、そして二点目にはひめゆり学徒隊の経験した沖縄戦を想像してもらうための方法を挙げさせていただきました。この二点に共通するのは、ひめゆり学徒隊、ひいては沖縄戦を記憶するという過程につながるということです。何度も思い出してもらうこと、そして戦時下の情景を想像して自らの記憶に刻むことで、ひめゆり学徒隊や沖縄

戦が忘れられていくのを少しでも食い止めることにつながるのではないかと考えます。今年で戦後80年となり、戦争体験の継承が課題となる時代に差し掛かっているのを身をもって感じています。戦後世代でも戦時下で起こっていたことを想像し、戦争体験者の方々に共感することができるような、そんな伝え方を私も模索していきたいです。



戦跡めぐりで南風原の陸軍病院壕の解説を聞く藤川さん

仲宗根政善日記抄(71)

(1980年)七月三日

「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」に、なくなった生徒たちの写真を添えて再版してご父兄の方々へもお送りしておいた。喜屋武断崖に追いつめられたとき、だれにも知られず岩かけに朽ちて行くさびしさをしみじみと感じたからであった。以前から一人一人についての思い出を、学友に書いてもらい、それをまとめて出したいとも思ったことがあった。

三十三年忌に、生き残った学友たちが、写真を集めてまわったとき、今頃、写真とは何だとおこられてすごすごと帰つて来たとも聞いて、写真をアルバムにすることにも躊躇した。今度、なくなった方々の写真を添えることについても気になっていた。遺族の方々の涙をさうだけで、なんの甲斐があるだろうかとも思い気になっていた。去る慰靈祭の時、父兄の前に立っても、何となく気がひけた。善意でやったことが、父兄の心にどううつるのだろうか。山入端初子の親は、もう九十才になる。宣名真の渚に近く一人で住っていて、なお娘がいつかは帰ってくるだろうと待っておられるという。こういう方々に、なくなった娘たちの写真を送つてあげることがよいことか。そんな懸念がついて廻った。

今日、角川の伊達百合さんの手紙に、一人の母親から、書物の受取りを許否して来たが、どうしようかと書いてあった。これほどショックを受けたことは近頃はない。かつて屋良ヨシ子の家を名護為又に訪ねたことがあった。ヨシ子さんが、ひめゆりの塔でなくなったことをそのおじいさんに告げると、昔から七年たたなければ人の生死はわからない。貴方はヨシ子の最期をたしかに見とどけまし(た)かと、きつく問いつめられて困惑したことがあった。あれからは、父兄を訪ねて行く気もなくなってしまった。父兄には、娘らの死をいつまでも信じたくない。どこかに生きていてくれるようにと祈りつづけている。その祈りをぶちこわしてしまうことは親切ではない。

ひめゆりの塔をめぐる人々の手記は、出来るだけ忠実に事実を書き残そうとつとめた。それが、なくなった生徒たちの供養にもなればと、書きつづったのである。

しかし、父兄(に)しては、あるいはいらぬせっかいと感じられるかもしれない。過去いっさいのことには耳をふたぎたい¹のである。口によって語られ、筆によってつづられても、生きみの娘らは帰って来ない。過ぎ去った話はもうしたくはない。生き身の娘をかえせと言われるのである。

あの本を拒否して返された。母親のお気持は十分理解出来る。しかし、親からすれば、お前らには、何もわからないのだともいわれるかもしれない。わが子をどうして返してはくれないのか。わが子をかえさずして何だとつめよられているような気がしてつらい。過去にはもうふれず、いっさいを流してしまう方がよいのか。親のいかりにふれると手を合せて頭をたれて、じっとそのいかりにたえるしかない。

戦争へは、お前らが連れて行ったのではないかと言われているような気がする。もとより、戦争へ勇み立って行ったわけでもなく、強いられて行った。しかし、強く拒否はしつづけて

はいない。ひきずられた者も、責任がある。

本を有難く受取ってくださった父兄も多いには多いが、父兄には、あるいは拒否したい気持の方がほかにもいるであろう。まことに心の痛むことだ。三十五年たつても自らの負うたつみからはのがれられない。善意でやったことが喜ばれないのである。人間の知慧のあさはかさをしみじみと感じさせられる。戦争にひきつれて行ったのは、自分ではなかつたと、にげてはいけない。まともに拒否された事実はうけとめられなければならない。

「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」を各遺族に送つたが、受けとることを拒否した親がいた。

拒否にあい悲しみは深し亡き娘らの
跡をつづりし手記を送りて

(1980年)七月四日

二週間に一回、金曜日に、琉大病院²に、外間政哲医師の診断を受けに来る。順番を待つて、保健学部の図書室で本を読んでいる。窓の外を眺めていると、いつも戦争中の悲しい思い出が浮ぶ。

今では、市民会館や郵便局の大きな建物が建ち並び、与儀公園も出来て、戦前のおもかげは、全くない。

(中略)二十年三月二十四日、港川方面から大地をゆさぶつて艦砲弾がとど(ろ)きはじめた。私は、城岳食糧営団の壕から飛び出して、敵機の飛びかう中を学校へと急いだ。ところが、開南中学から、壺屋部落の間は、遮蔽物一つなかった。やむをえず川べりの相思樹のかけにかくれながら、鉄道線路に出て、ひめゆり橋を渡つて、学校にたどりついた。

戦争がはじまって、女子部・一高女の生徒は、軍命によって、陸軍病院の勤務を命ぜられた。それから、一高女生は津嘉山の経理部に配属された。最初、食糧の確保が任務であった。

艦砲がやや静まり、夜がふけると、彼らはモンペ姿で、食糧さがしにかり出された。軍でもっとも欠乏しているのは、新鮮な野菜であった。それをさがしに遠く与儀農業試験場まで来たのであった。遠く艦砲のひびきをききつつ、試験の農場の野菜をはこべるだけはこんで持ち帰った。

母校の農場へも出かけて行った。その夜はちょうど母校が破壊されて炎々と燃え夜空をこがしていた。教室も寄宿舎もながくすみなれた建物がメラメラと燃えていた。歴史と伝統にはこる母校の最後をおしみながら、自ら作った農場の野菜をどっさりとて持ち帰った。

*1「ふたぐ」は「ふさぐ」の古語的表現であり、「耳をふたぎたい」は「耳をふさぎたい」と同じ意味。

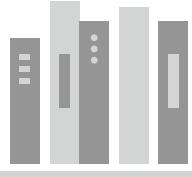
*2 琉大病院は当時、現在の那覇市与儀にあった。

※読みやすさを考慮して、旧字体は新字体へ変更した。明らかな誤字は改め、脱字や送り仮名、その他必要な情報を()で補った。

※適宜省略し、(中略)などで表した。



『ひめゆりの心』
『八重山の思い』
川平カツ著 南山舎 2024年



女師・一高女の学徒隊、いわゆる「ひめゆり学徒隊」の体験談は、これまでにも幾つか刊行されてきた。本書は、それらにつらなるものの一つで、戦時体験ということに限って言えば、重複していく部分も多いが、もちろんそれは、全体を概括しての話であり、本書には、これまで、あまり知られてなかったことも多々取り上げられていた。

その一つが、表題にみられる「八重山」出身の生徒たちに関する記述である。戦場における、八重山出身学徒たちに関し、及ぶかぎりの筆をつくしていることである。例えばそれは、解散にあたって先生方と一緒に行くか、八重山出身の先輩たちと一緒に行くかの選択をせまられて、後者を選んだことにもよくあらわれているように、八重山出身のひめゆり学徒について多くの頁をさいていた。

その二つが、捕虜収容所の時代ともいえる時期、居住したところが中川であったということである。これまでの学徒たちの体験談には出て来なかつたのではないかと思える地域である。それは、ひめゆりたちが、さまざまな場所に散らばり、決して同じような敗戦直後を生き抜いたのではなかつたことを、語るものとなつていて。

その三つには、他の多くの学徒たちが収容所から文教学校に駆けつけたのとは異なり、一旦八重山に引き揚げたのち、再び上霸し、学び直した上で、郷里で教職についたことである。本書の圧巻は、その郷里での教職時代の足跡を記した章にあるといつていいだろう。

ひめゆり学徒たちが、戦後教壇に立て、奮闘した記録も、これまた多いが、本書が、他と大きく異なるのは、八重山地区における学校の様子が、取り上げられてることである。

1947年4月、石垣初等学校を皮切りに、1984年、平久保小学校で、早期退職するまで、11もの学校で、教鞭をとったその実践記録といつていいものである。いわば、八重山の戦後教育の歴史を映し出したものであるといつていい。言うまでもないことだろうが、多くの苦難と喜びが混在した年月であった。

例えば、その苦難の一つに「本人にひと言の打診もなく異動」を言い渡され、「元に戻すようお願い」しても「すでに発令したので、取り消しはできない」といわれ、退

職するべきかどうか悩みぬいた体験をしたことや、「当時は教科書もなく無いため、内地から転校してきた生徒たちの本を借り授業」したといった教材の不足を解消するための苦労をしたことなどである。しかし、そのような物の無い環境をはねのけ、子供たちが、積極的に意見の発表をし始めたこと、子供たち全員が、期せずして、鍵盤ハーモニカを完全に演奏できたこと、とりわけ、「ウムズナー（イイダコ）」の話は、これにまさる体験はないといえるもので、教育の在り方を示唆するものとなっている。土地と結びついた教育が、いかに、生き生きとしたものになっていくかを示してあまりあるからである。

物が無い中で、自由闊達な生徒たちを育て上げた、そのような先生たちの多くが、ひめゆり学徒として戦場に出、文教学校で学びなおし、教壇に立った人たちであった。彼女たちはまた、戦争を体験した教師として、戦争の無い世界を願い、自分たちの戦争体験を、平和講話というかたちで語りはじめていく。

6月になると、多くの学校で、戦争体験者の平和講話が行われるが、「わたしも、毎年、依頼がある学校に岡山で、子供たちに平和講話をつづけました。子供たちはみな真剣に聞いてくれ」ました、と「VI 平和講話（学校訪問）」の章にはある。

そこに、「平和講話」で話した原稿はない。しかし「校長先生のお礼状」を読めば、どのような話であったか、推測できるであろう。というよりも、その「平和講話」は、「III 聞いてください、命知らずの戦いの話を」を要約したものであったはずである。

校長先生は「一・二年生を含めた七七〇名の全児童が、体験者のみが語ることのできる先生のお話を、一時間も の間、私語ひとつなく真剣に聞き入っていました」と書いているが、もう「体験者」の話を聞く時代は終わってしまった。話すことのできる「体験者」も、書くことのできる「体験者」も、いなくなる時代に入る。

そのような状況のなかで、生まれたのが本書である。本書が大切なのは、叔母の原稿を、姪が整理し、まとめたという点もある。戦争体験をどう受け継いでいくか、その答えの一つがここにあるからだ。

お知らせ

■第8回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」募集開始

「第8回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」の作品を募集しています。テーマは「ひめゆりと○○（自由選択）」。ひめゆり学徒隊や沖縄戦について、あなたが感じたことや、学んだこと、考えたことを、映像作品で表現してみませんか。前回は、高校生の作品が受賞しました。プロ、アマ、年齢は問いません。多くの皆さまのご応募お待ちしています。

くわしくはこちら



締切：2026年2月1日（日）必着

団体プログラム(平和講話・ビデオ視聴)のご案内

当館では、平和学習プログラム（職員による平和講話（約40分）やビデオ視聴（約30分））を提供しています。プログラムは多目的ホールにて、団体貸切で行います。事前予約が必要です。FAX・Web・電話でお申し込みください。

▶対象：当館を見学する団体 ▶実施時間帯：9:05～16:00（最終開始時間）

- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルとなる場合もあります。
- 収容人員は約200人（席）です。
- 多目的ホール使用料 1回：3,300円（同一団体2回目以降は2,200円）
※多目的ホールは、上記平和学習プログラム以外での貸出は行っていません。

（下記の期間はご予約はできません）

- 年末年始（12月30・31日、1月1日～3日）、旧盆（旧暦7月13日～15日）、慰霊の日前後（6月21・22日、24日）はビデオ視聴のみ予約可能です。
- 慰霊の日（6月23日）は講話・ビデオともに予約できません。

重要 団体予約の受付方法変更のお知らせ—電話優先ではなくなります

このたび、予約の際の利便性向上を目的として、受付方法の見直しを行うこととなりました。

つきましては、2026年11月以降のご予約分に関する受付方法を下記のとおり変更いたします。

2026年11月以降の入館予約分（2025年11月1日午前9時受付開始）より

- 受付方法：FAX・Web・電話
- 受付の順番：受付方法に優先順位はなく、受信時間の早い順に予約を受け付けます。
- 申込の回答：受付後、1週間以内に順次回答書をお送りいたします。

※予約開始日については変更はありません（入館予定日の1年前の同月1日午前9時より開始）。

「9:00」より前に受信した申込は無効となります。ご注意ください。

くわしくはこちら

※200名以上で来館予定の場合は、分割入場をお勧めしています。申込時に分割で申し込みいただくと、よりスムーズなご案内が行えます。



誠に恐縮ではございますが、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Information

- ・開館時間 9:00am～5:25pm（入館締切は5:00pm）
- ・年中無休 ※台風などで路線バスが運休の場合は休館
- ・入館料 [個人]大人450円 高校生250円 小中学生150円
[団体]大人400円 高校生200円 小中学生110円
※団体料金は20名様以上、一括払い。 ※団体入館は予約制です。必ず事前にご予約ください。

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより
第76号 2025（令和7）年11月30日発行

【編集・発行】

公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館
〒901-0344沖縄県糸満市字伊原671-1 TEL098-997-2100 FAX098-997-2102

ひめゆり平和祈念資料館

検索

<https://www.himeyuri.or.jp/>

